

解き明かされる生態系崩壊の理由 河川行政に英断を迫る

評者 大熊孝（新潟大学名誉教授・NPO新潟水辺の会顧問）

本書は、漁師4人を含む長良川の識者18人が執筆し、それを森林文学者の蔵治光一郎氏（東京大学教授）が編集したものである。

本書では、まず河口堰ができる前の長良川の豊かさが漁師によって語られる。河口堰ができてからはアユが減り、ヨシ原が消失し、豊かな生態系が崩壊していったが、その理由が解き明かされていく。その過程は推理小説のようで、引き込まれた。伊勢湾は2m以上の干満差があり、長良川は河口から約40km上流まで水位変動し、汽水域が存在していた。しかし、河口堰の建設で水位変動がなくなり、淡水化によって生態系が貧弱になってしまったのである。

そして、河口堰建設の目的であった水資源開発の実態が示される。開発水資源量は日量約194万m

であるが、主目的の工業用水の利用はなく、現在は水道用水として日量約31万m³が取水されているに過ぎない。この程度の量であるならば、本書は、取水の方法を工夫すれば、河口堰のゲートを開放できるといっているのである。河口堰を開放すれば、当然塩水が遡上して、かんがい用水に影響を与える。しかし、河川水は軽く、遡上した塩水の上を流れる。かつては「アオ取水」といって、その表層の塩分の少ない水が取水されていた。現在は観測機器の発達もあり、アオ取水の現代化は可能でないかというのである。本書は、汽水域を回復する開門操作を「最適運用」という言葉で提案している。

この提案は国交省も水資源機構も実行する気配はないようであるが、最後にオランダと韓国におけ

る河口堰の開門事例が紹介され、なかなか説得力がある。

現在、日本橋を覆う首都高速道路の撤去工事が景観の回復と老朽化対策を目的に巨費をかけて進められている。河川行政と道路行政は異質かもしれない。しかし、60年前に東京オリンピックに向けて強引に建設された首都高速道路が撤去される時代になったのである。長良川河口堰も、景観的に奇抜すぎるし、いずれ老朽化も進む。本書は、河川行政にその英断を迫るものであるといえる。



『長良川のアユと河口堰 川と人の関係を結びなおす』

蔵治光一郎 編

農文協 2420 円（税込）